

一九七七年二月一〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail: shakaisunshin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話 03) 3337714 6449 FAX 03) 3229915 367

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三二 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額 700円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

貨幣(金)とはなにか

伊勢 太郎……2

早く改悪したい、しかし進まない………3

— 憲法記念日の全国紙「社説」から —

「過ぎし愛しき日々」向坂ゆき遺稿集を読む 蓑輪 泰臣……5

— 娘の名は「ゆき」 —

全原発停止、ゼロめざし 滝野 忠……7

— 反原発、私の勉強 —

橋本君のゆくえ………11

— 日本政治「動かない」の落とし子 —

読者からのおたより………13

旬刊 社会通信

NO. 1120

二〇二二年五月一五号

二〇二二年五月一五日発行
(毎月一日・一五日二回発行)

貨幣（金）とはなにか

読書、執筆それに酒をこよなく愛する、まるで酒精のような友人から池上彰著『お金から見ると世の中わかる』の感想。

「カネとは近代資本制においては、資本に売る労働力の対価が基本。その交換価値の記号であり『富Ⅱ財』の物象化した一種のクレジットの表徴で、容易に物神化する（昨今の拝金主義を見よ）。このカネのことがわからないと、金融恐慌と市場、リーマンショック、欧州経済危機、巨大負債もわからない」

酒精氏に触発されシェイクスピアやゲーテ、バルザックが金（貨幣）、資本をどう描いているかを探る古典の世界に旅立った。ゲーテは『ファウスト』でこう述べる。

べらぼうな。もちろん、手とか足とか、頭とかおしりとかはあなたのものです。

だが自分が新規に享有したものは、

だからといって自分のものではないとはいえない。

たとえば私が馬六匹の代を払ったとしましょう。

すると奴らの力は私のものではないでしょうか。

私はどんだん駆けられる、まるで足が、

二十四本あるような堂々たる男だ。

『ベニスの商人』で高利貸資本を描いたシェイクスピアは貨幣の本質を『アテネのタイモン』のなかでいう。

「黄金か。貴い、キラキラ光る、黄色い黄金か。いや、神さま！私はだてにお祈りしてるんじゃないよ。

こいつがこのくらいあれば黒も白に、醜も美に、

悪も善に、老も若に、臆病も勇敢に、卑賤も高貴にかえる。

こいつは……司祭を誘惑して祭壇からひっぱりだし、

なおりかけの病人から枕をひっこぬく。

そうだ、この黄色い奴隷めは、

信仰の絆を解きもすれば結びもするし、呪われたやつを祝福もする。

こいつは癩病やみを好きにさせ、泥棒を栄位につけ

地位をやり、他人を膝まづかせ、元老院なみの勢力をもたせる。

こいつはまた

老いぼれの後家のところへ求婚者をつれていく。

呪われた金属め、

おまえは人間をだれでもたらしこみ

諸国の人民をだます娼婦だ。」

マルクスとエンゲルス『往復書簡』に目を通してある時、マルクスがエンゲルスにバルザックの『村の司祭』のなかに「もし工業生産物が、その価格が貨幣で帰ってくるのについて、二重の価値をもっていないならば、商業は存在しないだろう」とある。君はこれをどう思うか？と問うています。この言葉を見つけ、バルザックに関心を持ち、『ゴブセック』（岩波文庫）にこんな一節を見つけました。

「もしきみがわし（ゴブセックという高利貸し）くらい長く生きたとしたら、ひとりの男がかかわるに足る確かな価値のあるただ一つのものとは何か、分かるだろう：それは、金さ。金は人間のあらゆる力を代行する。：とところで金というやつは、あらゆるものを胚芽のかたちでふくんできて、あらゆる者を現実として生みだす」（二五～二六頁）

さらに、国家や裁判についてもこんな記述に出くわしました。

「金持ちどもは自分たちの財産をまもるために、裁判所や裁判官を発明し、無知な輩が飛び込んでいって身を焼くことになる一種のろうそくともいえるべきギロチンを発見した。」

ここに貨幣はすべてのものを買う、すべての対象を我がものにするという属性が、経済学の言葉でなく文学者の感性で解き明かされていることを知る。

早く改悪したい、しかし進まない…

—憲法記念日の全国紙「社説」から—

憲法記念日の五月三日は、各紙朝刊を買い求めることから始まります。雨、「うとうといないな、せめて天気だけでも気持ち爽快にしてくればよいのに」と思いながらの年中行事です。今年には地震・津波・放射能、すすまない復旧・復興と棄民化される被災者、さらには一票の格差と二院制のあり方、日本海をはさんでの北朝鮮「脅威」論、竹島をめぐる南朝鮮との領土問題、尖閣をめぐる領土、資源獲得「戦争」といったなか、各紙はどんな社説を掲げるかが問題意識です。

全国紙の憲法への主張は皆さんよく知っていらっしやいますよね。「前文、九条を一日も早く取っ払ってしまえ」とする読売、産経、日経に対し、朝日、毎日、「前文、九条にかつてのような支持はない。改憲論者の声も取り入れられなければ」と、憲法改悪ににじりよっています。東京の地方紙である東京新聞は名古屋に拠点をもつ中日新聞の子会社ですが、「生活が第一。憲法理念をくらしに」を貫き続けています。

今年の各紙社説の特徴は、地震・津波・放射能への復旧・復興がすすまないことに焦点を当てていることです。

東京の社説は『人間らしく生きるためには』。一面の「今こそ憲法の出番」等で若者雇用、被災者救済がすすまないのは政治が憲法一三条、二五条の生存権を置き去りにしているからと論断。「国は努力しているのか」と訴えます。

朝日は『我らの子孫のために』と題し、若者、子ども、一人親世帯の貧しさが憲法前文と一一條、さらには二五条と矛盾することを強調してみせています。しかし、論旨は具体性に乏しく、「何が言いたいのか」。原発、九条改悪、消費税にきっぱり反対をいわない朝日の矛盾そのものです。

二つめの特徴は危機管理等、二院制のあり方に焦点を当てていることです。

毎日は『統治構造から切り込め』。毎日は己の立場を「憲法は不磨の大典ではない。

論憲」としてきました。論憲の主張はほとんど憲法改悪への条件づくりに変化しています。社説の題からも明らかです。自民党憲法草案や橋下「船中八作」が憲法改悪を強く主張していることはご存じのほず。「決められない政治が実態」を前面に出し、「橋下提案や自民案を寄り深い論議につながるきっかけにしたい」。

読売社説は『改正論議で国家観が問われる―高まる緊急事態法制の必要性』。読売は中曽根首相の盟友渡恒さんが全てを取り締まっているといわれます。中曽根は九二歳、五月一日に開かれた新憲法制定議員同盟の初大会で、おれの目の黒いうちに立派な憲法を安置したいとの宿願はほぼムリ。というわけで、若い者に「改正の時は必ずくる。慌てずに四股を踏み、立派な憲法を作って欲しい」。遺言なのでしょう。思いは渡恒さんも同じ。主張は自衛隊が「自衛権を行使する国軍たることを明確にせよ」。

読売はこれまでも憲法試案をつくってきましたが、新たに作りたいとするのが産経です。『自力で国の立て直し図れ 今のままでは尖閣守れない』。『自力で』がみそ。「米国内でも日本の憲法改正や集団自衛権の行使容認などが、日米同盟の強化に資するという見解が広がっている。日本が国の守りを自力で行わなければ、日米共同防衛の実は上がらない」。自衛権行使を可能にする憲法を早くつくれが趣旨なんですね。

日経は「おれは会社役に立っている、役に立つために」と一部上場会社「社員」が購読者。社員はむろん重役、管理職たちすら会社やめたら「日経より他の紙がおもしろい」とサヨウナラ。財界の意向を政府に伝えるのがこの新聞。社説のテーマは『憲法改正の論議を前に進めよう』。憲法改悪が進まないことへのいらだちを「動かない政治」といい、改悪への取り付け道路の整備、憲法への館への工程表と設計図づくりを呼びかける。具体的には改憲の条件づくり。九六条改悪、そして緊急事態への対処、さらには衆院が参院に優越する仕組みづくりです。

マスメディアは憲法改悪への総保守勢力の一翼にどっぷり取り込まれています。彼らの関心は「国民」を支配層に組み込むこと以外にありません。われわれ労働者・勤労者は支配層に与みしてもなに一つ得るものはありません。読売では「憲法六六年検証」を特集していました。焦点はなぜ前文（平和主義）、九条（戦力不保持）、九六条（三分の二規定）がつくられたです。

理由はかんたんですよね。日本を占領したのは米国。米国に戦争を仕掛けたのは日本。日本は独と伊のファシズム国家がつくる三国同盟の一員でした。米国が全面的な武装解除をおこなったのは日本だけ。日本は当時の米国、ヨーロッパ諸国にとって「天皇をいたたく正体不明」の国だったのです。それはベネディクトの『菊と刀』にも明らかです。日本は許すことのできない「野蛮人」と、前文、九条、九六条をつくったのです。

それが日本国憲法です。世界はたった数年にして大変身しました。中華人民共和国、東欧社会主義国家群の成立による社会主義世界体制の成立、そして一九五一年からの朝鮮戦争でした。北東アジアは「東」と「西」が競いあう戦地となり、日本は米国によって「不沈空母」の役割を与えられたのです。

再軍備です。これに総保守陣営は歓呼し、今日の日米同盟へと発展するのです。

「過ぎし愛しき日々」向坂ゆき遺稿集を読む

— 娘の名は「ゆき」 —

松本市里山辺にお住まいの和氣誠、文子様より送り物が届きました。開けてびっくり「本」です。まずは表紙の柄に目を奪われてしまいました。向坂ゆき夫人亡き日の和服姿が自然に思い出されてきます。

題名に『過ぎし愛しき日々 向坂ゆき遺稿集』とあります。編者あとがきに「今年向坂ゆき没後五年の節目にあたりますし、向坂逸郎生誕一一五年の年でもありますので、この折に向坂ゆき遺稿集を私家版に纏めた次第です。」「『過ぎし愛しき日々』とは、私の向坂夫婦と共にあった日々への愛惜でもあります。」「

二〇一二年一月 和氣文子と書かれています。

とりあえず私でごめんなさい

「何でお前なのか」「向坂夫婦をどのくらい知っているのか」とのお怒りがあつちこつちから飛んできそうです。その通りです。

私は、向坂逸郎という社会主義者から目と目を合わせて直接勉強をした記憶がありません。向坂逸郎著者本を通してのみのお付き合いです。ましてや、向坂ご夫婦となれば未知の世界、だからこそ、私にとってこの本（『過ぎし愛しき日々』）は、「向坂逸郎とは、向坂ゆき夫人とは」を新鮮に感じる事ができた最高の本に思えます。

少しだけ思い出を 娘（ゆき）への宝物

私には、大切にしている写真が一枚あります。二一年前に写した写真です。そこには、我が長男坊義太郎一歳を膝に抱えている向坂夫人、その横に灰原茂雄さんが一緒に記念写真です。この時の会話ですが、灰原さんが「名前は」と聞いたところ「さつきも言ったでしょう。大森義太郎の義太郎です」と少々お怒りのようなご返事をされていた記憶が残っています。

それから一〇年経って我家に長女が誕生しました。その名前が「ゆき」です。奥様にご相談して「ゆき」のお名前をいただくこととなりました。娘が大きくなって「お父さん『ゆき』さんでどんな人だったの」と聞かれたときに、その答えを出してくれる大切な我家の本《宝物》になりそうです。

私の愛妻物語 向坂逸郎

向坂ゆき夫人を知るには、『（附）私の愛妻物語』のところが最高ですね。ゆき夫人の生い立ち、結婚生活、趣味、性格、そして病気になるれた事など、向坂ゆき夫人そのまんまを、向坂逸郎「本音で語る」との感じを受ける事が出来ました。

マルクスには多くの子どもがいましたよね。その一人「エリナ」と名前を付けた私の先輩を思い出しました。そうそう「逸郎」と付けた先輩もいましたね。すいません。わき道に逸れましたが、向坂逸郎御夫婦には、お子様が何故いなかったのだろうか。誰しもが一度は思う事ではなかったでしょうか。その答えが書かれました。奥様

が病気になるれた事で、奥様のお体を心配し、医者のお忠告を守ったこと、とありました。私の先輩達で「社会主義者はいつ官憲につかまるかわからない。子どもがいると行動が鈍る」などと、真面目な顔で説明していた事を思い出しました。「うそつき」と今は笑ってしまいます。

「私には三人の子どもがいます。社会主義者になれない私」。しかし、ここを読んだときに、喉に詰まっていたものが、なにかしら、気持ちよく流れていく感じがしましたね。またまた逸れてしまいました。

後は読んでのお楽しみ ゆき夫人、「向坂逸郎を語る」

本当に、人間味溢れる内容です。府立第二高女時代の同級生とのお付き合い。民間戦線事件で逮捕監禁され留置場に入れられた時、毎日欠かさずお弁当を届けた話し。

人物紹介（忘れ得ぬ人々）として思い出を語られています。「私の年代では知らない方々の名前がよく出てきますね。」そして、随所に人間向坂逸郎を語られています。

今の時代を生きるうえで

胸に響く言葉を紹介します。社会主義の光が見えない、そればかりか労働運動の衰退、自信と確信が見えてこないなかで、社会主義への展望を失い、労働運動からの「卒業」を宣言する人が多く見受けられるようになりました。さびしいですね。そんな人のために、「ここだよここ」と思う所がありましたので少々長くなりますが改めて紹介します。

どの時代も向坂は「そのうち俺たちが必ず勝つ」といつてくよくよ悩んだりしたことはありませんでした。戦前九大を追放されたとき、その後人民戦線事件で留置場に入れられたときも、「いずれ、正しいものが勝つ」という信念でいたように思います。

いまは内外共に激動の世の中ですが、「先生がいらしたら、何とおっしゃるだろうか」というお手紙を私もいくつかいただいております。向坂の申し上げる事は決まっています。「元に戻って、古典を一生懸命勉強しろ」と言うでしょう。

向坂は生前、武者小路実篤の次のような言葉を好んで用いていました。「勉強、勉強、また勉強。勉強のみが奇跡を生む」。そればかりでなく、本人からすると「マルクス主義は必ず勝利する」という確信は不動のもので揺るがないと思います。「いま社会主義体制がどんどん崩壊しているのは、間違った社会主義を遂行してきたからだ」。向坂はこう言うに違いありません。

ですから、「元に戻って、古典を見つめ直さなければいけない」と言うに決まっています。とにかく、歴史を辿ってみてもまた研究の成果をもってしても、再び資本主義に逆戻りすることは有り得ないという確信を強く持っていました。

向坂は社会党の中でもまた日本労働運動全体の中でも、多数派になったことはまづなかった。常に少数派だったんじゃないでしょうかね。三池闘争でも結局は敗北しましたが、それでもひどく落胆したという姿を見たこともありませんでした。お陰でそばにいる者もがっくりとなることもありませんでしたね。

・このように語られています。

この本には、随所に「ここだよここ」と思うところが語られています。読まれる一人ひとり思う所により「ここだよここ」が違うかもしれませんが、自分の歴史を振り返るいい機会にもなる「すばらしい本」である事は間違いありません。一読をお勧めします。

(荻輪 泰臣)

全原発停止、ゼロめざし

— 反原発、私の勉強 —

三月一日

五月五日、全国の原発五十基がすべて停止した。日本の電力会社は世界最大の民間電力会社である東京電力他九社。全国を北海道、東北、北陸、東京、中部、関西、中国、四国、九州、沖縄に分割し発電と送電を行なう地域独占企業である。原発を持たない会社は沖縄だけであり、五十基の多くは東北、太平洋・日本海沿岸に集中する。

これは原発がどれほど危険かを原発事業者が「熟知」していたことを示す。東京電力は人口稠密な東京・関東管内に原発を置かず、北陸・東北電力管内の新潟県の柏崎刈羽、福島県に集中させていることに明らかだ。「安全」なら東京湾沿岸に設置することで、長大な送電網、送電中の電力消失のムダを十分に省けるにもかかわらずである。

原発爆発は一億三千万国民に、原発は①コストが安い、②安全だ、③CO₂を出さない(きれい)のウソを真剣に考え、原発にどう立ち向かわなければならぬかを教えた。私の場合もそうだった。原子物理学でいう放射能、放射性物質、放射線とはなにか。放射線は地球環境にどんな影響を与えるのか。ウラン鉱石は石炭や石油、ガスのように原料のままでは使えないから、鉱石から燃料ウランをつくり出すまでにどんな工程が必要なのか。ウラン燃料を燃やした使用済み燃料を無害にする技術は開発されているのか。スリーマイルやチェルノブイリの爆発は住民にどんな影響を与え、今なお与え続けているのか。また廃炉への道はといったことなどである。

まず基礎知識

私は原子物理学の知識はまったくない。手に取ったのは『理科がおもしろくなる12話』(岩波ジュニア新書、山口幸夫著)。まずは「物質の最小単位」の原子と元素、原子の構造、ついで「量子力学」のもう一つの光—X線、さらに「原子力発電と放射線のゴミ」にあるウランの核分裂、天井の火、放射能の半減期といった基礎知識を整理した。

次に手にしたのは湯川秀樹、朝永振一郎、坂田昌一らと原子力が軍事と深く関わっていること、原子力の安全性に警笛を鳴らし、国際的に反対運動を展開した武谷三男編の『原子力発電』(岩波新書、一九七六年)でした。この本の構成は、つきまとう死の灰、原子力発電のしくみ、原子力発電の事故、巨大化の問題点、日本の原子力発

電は、クローズド・システムは可能か。筆者は「序」に原子力について見通せるかぎりにおいて、こう警笛を発していたのです。

「原子力利用の長い道のりは、目前の目的のためにあせればあせるほど、ますます遠い見果てぬ夢となっていく。原子力はまだ人類の味方でなく、恐ろしい敵なのである。日本の諸所方々に建設され、さらに計画されている大型の原子力発電所が何をもたらすだろうか。さらに世界の原子力発電所が人類に何をもたらすだろうか。われわれは無関心でいるわけにはいかないのである。

現代はいまだに原水爆時代であって原子力時代ではない。これは私がすでに東海一号原発導入のとき以来唱えつづけてきたことであるが、現在もそのまま成立する。一般にいつて戦後の技術革新をなう主要な技術は、第二次大戦中に開発されたもので、戦争の性格を強くもっている。圧倒的規模での大量生産、大量消費は、第二次大戦の『みな殺し戦争』のやり方を、利潤場面に転用したやり方であり、戦争は勝つことだけに目的があり、あとは野となれである。戦後平時の各国独占資本のシェア争いの場面で同じことが行なわれ、あとは野となれ式競争が、地球汚染をまねき、特にブレーキのない日本で公害天国を現出させた。

第二次大戦およびその後の技術革新の特徴を象徴的にあらわしているのが原子力である。これは戦争技術としては人類の滅亡を、今日直ちに用意しており、平和利用も不用意にやられたとしたら、やはり、じわじわと人類を滅亡に導くであろう。

結論的にいうと、原子力平和利用は一方において、原水爆を克服しない限り、人類のものとはならない。他方において、世界で利潤機構が本質的な役割を果している限り、人類を蝕む脅威をますます増大させていくだろう。」(二―三頁)

チェルノブイリでは

時は十一年四月から五月のとき、大型書店そして街の本屋さんにはこれまで原発推進の旗を振っていた商業出版社が、「今なら売れる。儲けられる」と、我先に安直、かつ扇情的、売らんかなの題ばかりおどろおどろしい書物があふれておりました。新潟に旅したのはそんな時です。上越新幹線の車中でのおしやべりのときでした。友人いわく、「六月に山口先生を招いて、原発の勉強会やるんです。」「山口さん、この本の著者かしら」と私。「そうです。そうです。考え、やろうとしていることが一緒なんでうれしいですな」と、話は大いにはずんだことはいうまでもありません。

新潟では友人が『柏崎刈羽』に行こう、びつくりするほど田舎だけど、大きな公共施設が目白押しよ」と。見学施設を訪ね、緊張気味の案内のお嬢さんたちに質問したことはいうまでもありません。

こんな時、わが連れ合いが生涯脱原発の市民科学者として原子力資料情報室を主催し、活動した高木仁三郎(二〇〇〇年死去)の伝統を継ぐ「高木学校」の勉強会で、新装本『チェルノブイリ原発事故』(高木仁三郎著、七ッ森書館、初版一九八六年刊)をおみやげに持って帰ってきたのです。セシウムだヨードだ、原発爆発の実態がほの見えてきた時ですから、「おい、その本貸せよ」、「私、まだ読んでないのに」もの

かはと取り上げ、ていねいに行っても講演録をまとめたものから「ウーンそうなんだあ」と、福島原発後の将来を考えながらの読書でした。

この本の構成はチェルノブイリでなにが起きたか、原発事故を考える―スリーマイル島原発事故が葬り去った安全神話、原発事故はなぜ起こるのか、チェルノブイリと下北計画、ポスト・チェルノブイリに向けて―核文明と自然としての人間、終わりの始まり。原発爆発から一年、高木氏は「まえがき」にこう記しています。

「チェルノブイリ原発の事故は、いうまでもなく史上最大にして最悪であり、しかもその汚染の影響は、いままさに進行中です。

『原発大国』日本に生きる人間として、私たちはこの事故をどう受けとめ、そこからどんな教訓をひき出すべきなのか。そういう問題意識から、事故以来約半年の間―私にとっても未曾有の経験の日々でした―私は考え、書き、発言してきました。それをまとめて収録し、一冊の書としたのが、この本です（第II章1だけは二年前に執筆）。書き下しではないので、重複もあり、また明らかに異なる読者対象に向けられた文章を含みます。今と比べてみると当時の私の推測が適切でなかった部分もあります。

しかし、読みやすさのための多少の加筆訂正を施した以外は、ほとんど最初書かれたまゝを再録しています。その方が、私の感じたまゝをリアルに伝えられると考えたからです。

本書はもちろん一般の読者のためのものですが、やや技術的な問題に入ったところもあります（第I章の4、第II章の1、2など）。この種の本を初めて読む方は、これらをまずとばして読み、できうれば後からそれらの部分にも目を通していただければ幸いです。

事故後のあの強烈な衝撃も薄れつつある日々ですが、日本に三三基の稼働原発をかかえ、世界で四〇〇近い原発が運転されている以上、チェルノブイリで起こったことは、常に生々しく私たちの脳裡にとどめておかねばなりません。そのために本書がひとつの役割を果たしてくれれば、というのが私の願いです。一九八六年一月」

高木さんの生存中の原発は三十三基でしたが、五十六基まで増殖した原発は浜岡二、福島第一四基の廃炉で、今は五十基。専門家は一基の原発が起こす事故の確率は五百年に一度といいますが、五十基あれば十年に一度の確率となります。世界の原発数は四百を超えているのですから一〜二年に一度の確率になります。これから原発をつくりたい中国、インド、中東等の発展途上国では、建設・運営は日・米・韓・ロの先進国まかせとなります。立地国には技術も専門家も十分ではありません。出向させられる原発先進国の要員は、緊張感本国の比ではありませんまい。

小出裕章さん

高木さんの後を引き継いでいるのが小出裕章さんかと思われず。彼は全国を一日に朝、昼、晩と渡り鳥以上の勢いで駆けめぐり、身体は大丈夫なのかと人ごとながら心配になるほどです。三月と四月彼の「原発はいらない！ 福島原発事故で明らかに

なったこと 政府・東電に求めること」と題する講演会に参加しました。

小出さんはやさしく、強く、語り口はゆったりとしながら巖(いわお)のようですらに歯切れ良く、私ども素人の心、胸、身体に一語一語重く強くひびいてきます。多くの学習会を見聞きしましたが、講演者には聴衆の基礎知識には知らんぷりで、危機意識をおおりに立て、不安におとし入れることで「反・脱」原発の意識を盛り上げたいとの印象をぬぐい切れないこともあります。小出さんの話はこれと正反対で、素人に分かった気にさせることなく、これを機会に勉強しなくてはとの気持ちをつくりあげてくれます。今のようにならわついた時代に必要なのはこんな学習なんですよ。原発の恐ろしさの基本をこれでもかこれでもかたき込むといった手法です。

小出さんの話は①原発と火力発電は湯沸かし装置、しかも原発は効率悪く熱の三分の二が温排水となり海に流される、②百万kw原発一基は一年で広島原発八百グラムの一千二百五十倍もの一トンの放射能をつくり出す、③放射性廃棄物の処理方法は無い。これら物質は消滅するのに百万年。④原発は巨大な自動装置・機械であり、事故から無縁な機械はない。誤りを犯さない人間はいない。だから原発は絶対安全だと絶対にいえない。じつに単純明快です。ですから、国策として押し進められた対策は「都会に作らない」と過疎地に押しつけたのです。

一言

小出さんの主張はじつに明快ですけど、議論が必要な点もあります。それは責任はだれかにつきます。小出さんは「極悪人は国、東電、原子力産業、マスコミ、司法、原子力推進派学者」ときっぱりと断言しながら、「私のように旗は振らなかったが、原子力の場にいる者にはふつうの人とは違う責任がある」、「それを許してきた、だまされた国民にも責任がある」と、「自分の責任も自分でとろう」と、極悪人と被害者をごった煮するかのような「総ざんげ」ともとれる主張をされていることです。

こんな主張に小出さんは本当にやさしい人と思われれます。そのやさしさは彼が「子どもを被曝させない、被曝から守らなければならない」を事故後の最重要課題とすることにあるように思われます。小出さんはその一方、「放射能は東電の所有物、がれき・焼却物等も同じ、したがって、東電に引き取ってもらうことが第一」と、正理正論を主張する。この主張には会場から割れんばかりの拍手が鳴り響いておりました。私ももちろん拍手です。

「自己責任」「だまされた者にも責任」の言葉をマスメディアはどう切り返すのかしらと思ひながら聞いておりました。四月二十六日付新聞、紙面の四分の一を占領する小出裕章著『騙されたあなたにも責任がある 脱原発の真実』の広告です。小出さんは「騙されたあなたにも責任がある」と述べたのは後半のほんの一部です。メディアはこれを大きくもってくるのです。

小出さんの主張は明快です。「騙された者」の責任の取り方は、「東電に責任をとってもらおう、放射能は東電の所有物なのだから東電に引き取らせる、そして脱原発への道筋を政府に明確にさせる」で最後を結んでくれれば僕は満足でしたのに。

橋 本 君 の ゆ く え

—日本政治「動かない」の落とし子—

撒餌(まきえ)に群がるメディア

こんな極右翼、人を人とも思わない人非人、首切り浅右衛門をマスメディアは連日連夜、「改革者」であるかのようにもてはやします。どうしてなのでしょう。

「府民感覚」から本質から外れた現象をマスコミだねにして世論をおおる手法です。活字メディアはインターネット等の電子機器の急成長に戦々恐々の現状、何かおもしろいネタはないかと鵜の目鷹の目の毎日です。そこに橋下はエサをまく。世は閉塞の時代、メディアの多くは「にぎやか」であればいいのです。

第二はたいへん「計算高い」人間でもあることです。知事に上りつめ、維新の会をつくるまでになった経緯をアツケラカンのカンでこう語っています。

「政治と行政の役割分担、違いを、府庁組織と事あるごとに議論し続け、僕は行政マンの専門知識、行政価値、行政の論理を最大限尊重しました。議論すべき時は徹底的に議論しました。その上で、直感、勘、府民感覚では、僕の方が上だろうということを見せるように努めてきた。いざという時の勝負どころは外さないようにしてきました。政治は情、勘、行政は理性、論理です。

ですから、この直感、勘、府民感覚、勝負で賞味期限が切れれば、政治家としては終了です。もう使い物になりません。こんなのは長く続きません。僕もかなり賞味期限に近付きつつあり、あとどれくらい持つやらです。自分の賞味期限切れを感じることも、直感、勘、府民感覚の問題です。直感、勘、府民感覚に鈍い人ほど、自分の政治家としての賞味期限切れにも気付かない。日本にはこういう政治家が多いですよね。」(『体制維新—大阪都』一二七頁)

「僕は、仕組みを変えるときは、一点突破の全面展開を考えます。ここがポイントだと思ふところにドーンとエネルギーを集中して、現行制度の欠点をあぶり出していく。どこに狙いを定めれば、有権者から、『それはおかしい。橋下の言うことが正しいから応援するよ』と理解してもらえるか、その突破口を探っていくのが、僕のやり方です。」(同、七六頁)

「一点突破の全面展開」

「一点突破の全面展開」ですって。この言葉、大昔に戦闘的な学生運動家が好んで使ってた。橋下君はもう少し大人ですから、大阪やぼく(橋下)にメディアの目をむかせるためには、おおむこうをうならせる言動、歌舞伎役者のように見得を切る振る舞いが必要、ぼくはそうしてきたんだといっているのです。

最近の傾向には得体の知れぬ「船中八策」、「原発再稼働への大阪八条件」、前述した老人連との芝居があったやりとり、などがまさにそうですね。

勝負とは彼にいわせれば選挙という戦に勝ち続けること。大阪府民の感覚は猫の眼、選挙も永続的に勝ち続けることはありません。もともと「永久に勝つ」なんてことは

ないのに、橋下君は「維新の会」という政治団体をつくり二百〜三百の国会議員をつくる大戦争に走り出しました。維新の会とその政策よくわかりませんが「船中八策」とやらは次の段階への「一点突破の全面展開」がねらい。しかし、間口を広げすぎましたね。

細川護熙と民間政治臨調

評論家やメディアは橋下くんと「小さな泉」の比較に多くの時間とページを割いています。橋本と小泉を比較すること自体がナンセンスじゃありませんか。小泉は凋落激しかったとはいえ、時の権力政党党首、権力の頂点にいた人間です。これにたいし橋下は「大阪で結果を出した上で国政に挑戦したい」としていた人間です。ところが「大阪旋風」に舞い上がりおっとり刀で、国政進出に名乗りをあげたにすぎません。

大阪府で彼が四年間にやったことは「財政再建」と称して労働者をいじめ、首切り、さらには府民の生活を切り捨てただけです。痛み、不満、怒りはこれからという時、さつさと「大阪都構想」を謳い文句に転身です。橋本君が通ったあととはペンペン草もはえなくなるのに、大阪の知人・友人からは「維新の勢いはものすごい」との連絡をもらうこともしばしばです。

こんな状況に、「今の橋下はかつての日本新党・細川護熙を思い浮かべさせる。どう考えればいいですか」との声もあります。

日本新党ブームが起きたのは一九九〇年はじめでした。この時の政治状況は国鉄、電々民営化にともなう国有地払い下げ、株上場等とが相まりバブル発生、バブル崩壊という一連の出来事のなかで自民党内の権力争いが激化し、自民党が分裂し、日本政治が「危機」の局面にありました。保守陣営にあつて多少遠目のきく連中が、「この危機を利用し、総保守の願望であった保守二党体制をつくれなにか」と、かついだのがルンペン・ブルジョアの細川だったのです。

彼らは「保守二党制」枠組づくりのため、政界・財界・官界・労働界（連合）、メディア、学者・文化人を総結集するため、中曽根第二臨調の人脈、手法をもとに、政治改革推進協議会（民間政治臨調）をつくったのです。細川は摂関家筆頭の血筋を受け継ぎファシズムと戦争への道をつくった近衛文麿の孫ですから、彼ら総保守勢力にとつては、「うまく御輿（みこし）に乗ってくれる」人物であったのです。細川が政治改革と称し、小選挙区制導入だけで政界からトーンズらしたことは、ルンペン・ブルジョアの証ですし、かついだ民間臨調の輩たちにはそれで十分だったのです。小選挙区制は「二大保守党づくり」への第一条件だったのですから。

その後、ギクシャクをくり返しながら二〇世紀後半から二一世紀初頭にかけて自民党対民主党の仕組みがつけられ、政治が「機能しない」今があることはみんな周知のことです。ここで考えなければならぬことは「機能しない」といわれる政治の中味です。政治はギクシャクです。しかし、独占企業・財界はもうけにもうけていますよね。政治は財界・独占が儲けることができる政策をどんどん実行していますよね。強い反対等の力が弱くなり、保守勢力、支配する者はやりたい放題なんです。ちがいますか。

支持基盤うすい橋下

こんな時の「橋下旋風」です。橋下の主張はすでに述べましたが、財界の主張そのものです。財界はこの十年来、道州制をたくらんできました。しかし、動きません。あたりまえです。道州制になれば四七人もいる地方のボス・知事は大半が失業します。大きな都市の首長・議員さんだって同じです。云うは易く行うは難しなんです。財界は橋下の「大阪都」に好意的です。しかし全面支持ではありません。それは「地方主権」か「地方分権」かの対立となり、将来の混乱の芽を含んでいるからです。

財界を中心とする総保守陣営は口を開けば少子化だ高齢化だ、世界競争がきびしいから自由貿易（TPP、FTA、EPA）が大事とわめいています。が、「まだもうけたりない、もつともうけさせろ」といつているにすぎないのです。したがって、かつての細川「日本新党」ほどの熱気は財界にも官僚にも政界にも学者・文化人、メディアにもありません。それは彼が出世街道から外れた官僚、陣笠時代の修行に耐えられなかった国会議員たち、政策を商品として、どこにも売り歩く物乞い学者たちに支えられていることにも明らかです。

「解散 総選挙も」といわれた一時期、本当におバカさんな国会議員、そして二つの保守、公明の政党は、橋下詣でに大忙しでした。橋本君にはプラスにはなれマイナスになることはいっさいありませんから、ウハウハです。そこに老人連中までもが参入です。橋本君にはありがた迷惑にちがいありませんが、メディアへの露出は高まるばかり。ついに、憲法を改悪しなければできない政策や二つの保守党が急ぐ原発再稼働反対論までぶち上げ人気取りに大童（おおわらわ）の有様です。

衆院任期は来年九月、まだ一年半ありますし、二つの保守党支持率は下がるだけの状況下、解散総選挙なんてあるはずありませんのにね。こんなドタバタ劇は橋本君がその場限りの軽薄な人物であることを証明するだけのことです。

◇ 読者からのおたより ◇

吹雪で立ち往生 今年の稚内の冬は大変な大雪で、特に二月は大雪と猛吹雪で二度三度と陸の便、空の便、船の便、市内バスやタクシーまでストップし陸の孤島になってしまいました。私たち自身もイカ工場から事務所に帰る途中に、先頭を走っていた車が吹雪で立ち往生し、渋滞しているうちに周りに雪が吹溜り、三時間ほど車の中で救助を待って、やっと帰って来たりしました。そのうえ三月も一〇日になろうと言うのに、今度は押し寄せてきた流水で海が埋め尽くされてしまいました。今年の冬は一体どうなっているのでしょうか？ 紺碧の青と真っ白のコントラストの風景はとんでもなく綺麗なのですが、流水の上を吹き渡って来る風は、笑ってしまうほど冷たく気持ちがいいです！ それでも、少しずつ雪解けが進み春が近くにきている事が感じられます。皆様の所は、もう随分と温かく桜など咲いているのでしょうか？

（稚内・ユーズカンパニー）
編集部より 四月七〜八日満開。会議の休憩、終了後に二つも花見をしてしまいました。ものすごい人ひとひと。これが東京の花見です。

廃止へ 三月も凄まじい活動。その一つが労働福祉会館と労働センターの廃止反対の闘い。市議会が敗北し来年三月末で両施設の廃止が決った。かつて労働組合は日本でも社会的に大きな力量があった。尼崎市立労働福祉会館の廃止は、労働運動の弱体化の象徴的な出来事であった。私たちは最大限の闘いを進めた。しかし反対集会に何百何千の集まりを作ることにはできず、署名簿も今回は一万二千筆に止まった。連合がやすやすと賛成にまわることを許してしまった。労働福祉会館に限ら

ず、労働運動の低迷が日本社会の昏迷の最大の原因だ。労働者派遣法も有期労働法制定の貧弱さも結局自らの力量のなさに帰着する。その間隙をぬって橋下維新の会が支持を集める。3・11以降、脱原発の運動は多くの良心と現地の人々の怒りで運動を持続できている。全ての原発を廃炉にしなければならぬ。今求められているのは原発事故対策マニュアルではなく、原発をなくすことだ。一人ひとりが行動に立ち上がることで、抜きに何も変えることはできない。(武庫川ユニオン JUN) 編集部より 労働福祉会館問題、本当に残念。でもこれからです。青虫が蛹になり孵化して蝶になるように、社会も必ず発展します。

結成大会 国労闘争団の解散によって、国鉄闘争の財産である地域の仲間との絆を大切に、闘いと支援という財産を引き継ぐために、誰でも、一人でも入れる労働組合「おといねっぶユニオン」を結成する運びとなりました。結成大会を開催しますので、是非とも激励のメッセージを寄せていただきます。お願いする次第です。これまで国労闘争団に寄せていただいたご支援の力を「おといねっぶユニオン」への叱咤激励に変えて寄せていただければ幸い。(おといねっぶユニオン)

編集部より 編集部は『真新しい旗』三月三十一日にみせてもらいます。久しぶりに貴地訪問、楽しく楽しみで、心浮き浮きしています。新しい門出に乾杯！ 闘争団の心意気を全国に発信して下さい。共闘の仲間たち、勇気百倍するにちがいありません。」とのメッセージを送りました。

「オキナワだより5」 昨日、釜石の知人から『東日本大震災・津波体験集 3・11その時、私は』が送られてきました。「このとき庶民が何を考え、何を訴えたかを知ること、私たちが民衆史に携わるものにとつて極めて重要な機会である」別の記録集の書評にあった色川大吉さんの言葉を思い起こしながら、今日から読み始めます。(沖繩・M)

編集部より 「オキナワだより」いつも楽しみです。先日は久しぶりにお会いできて嬉しかったです。許さん 野田政権は原発を再稼働に動いているが、一年前のことを忘れたのか。私の家の竹の葉が変わっています。放射性物質か？ 原発廃炉にむけた運動を組織的につくりあげよう。(埼玉・H)

編集部より 全国に無数の運動。今、必要なのは力合わせ。七月の集会をバネに。**国鉄闘争** 国鉄闘争を風化させないとはどういうことか。言いつくされてはいますが、自らの職場・地域で資本・当局と闘うことです。頭ではわかっていても闘えない弱さがあります。そうした色々な困難を仲間との団結づくり、組織づくりから進めていく努力が求められています。「モノ取り」「幹部請負」意識の克服が大きな課題です。(新潟・M)

編集部より 闘争団の仲間たち次の道を力強く進めつつあります。近く報告です。**感謝** 早速にありがとうございます。またたくさん送付していただき、学習資料として使わせていただきます。(長崎・M)

編集部より 感想等送って頂けると嬉しいです。

送金します 一年分の送金です。少ないですがカンパです。ご奮闘ご苦労さま。(岐阜・K)

編集部より 先日はお役にたてずごめんなさい。

最近号おもしろい 滝野さん、一一一九、八号たいへんおもしろい。現状を本質から説きあかす作風は「通信」だけになってしまいましたもの。(山梨・M)

編集部より 嬉しいですね。批判、注文もどんどん寄せて。

光 おつかれさんです。残金はカンパです。退職後、積ん読で貴誌を読み返しています。数年前の「通信」ですが、その内容は今、まさに光を放っています。少しずつ頑張りましょう。(沖繩・S) 編集部より こんなおたよりいただく嬉しくなり、出し続けていてよかったです。健康でお仕事なさってください。(松本市・A)

編集部より ご購読に感謝です。編集上の注文つけてくだされば嬉しいのですが。

やっただぜ V3 西本章さん 三たび市議会へ！ きびしい状況のなか、西本章は3513票でみごと3期目の当選をはたしました。教育現場の現状を何とか変えたいと思う広教組組合員や、誰もが安心して暮らせるやさしい街づくりを願うみなさんの熱い思いのこもった3513票です。これからも広教組は西本章と共に「いきいきと働ける職場」「子どもたちの笑顔があふれる学校」をめざしてとりくんでいきます。市議選勝利を組織の強化につなげていきましょう。(広教組新聞)

◇お詫言正◇

一一一九(五月一日)号、(もくじ)副題に誤りがありました。正しくは左記の通りです。

炭酸ガスと温暖化と氷河期をめぐって

— M君からの手紙と僕の返信 —